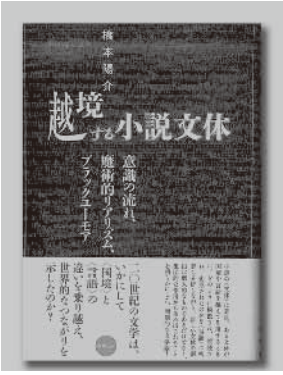

福嶋 亮大

橋本 陽介
『越境する小説文体——意識の流れ、魔術的リアリズム、ブラックユーモア』（水声文庫、2017 年）

著者の橋本陽介はナラトロジー（物語論）に関する良質の入門書をすでに数冊刊行するとともに、中国と日本の小説における「話法」をテーマとする比較文学論的な大著（『物語における時間と話法の比較詩学』水声社）も発表している。大雑把に言って、橋本の仕事の中心はジュネット、バンヴェニスト、ロラン・バルトらの物語理論を要約し、ヨーロッパのモダニズム小説にも目配りしながら、日中の近代作家の文体を詳しく分析することにある。それによって、彼は日本文学・中国文学・ヨーロッパ文学の文体上の差異（自由間接話法の処理、物語を時間的に展開させる文法的特性、等々）を浮かび上がらせようとするのだ。それは従来の文学研究の盲点を突くような貴重な仕事だと言ってよい。

本書でもその横断的な才能は遺憾なく発揮されている。橋本は二〇世紀の主要な文学運動であるモダニズム（特にその「意識の流れ」の手法）と魔術的リアリズムが、中国や日本でいかに「誤読」を孕みつつ受容されたかという問題に注目する。それは広い意味での文化的な「翻訳論」として理解することができるだろう。

例えば、橋本はジョイスの「意識の流れ」の手法が伊藤整の『ユリシーズ』翻訳で日本語化された後に、川端康成の「水晶幻想」の文体に影響を与えたと見なす。いわば本物のジョイスではなく偽物の（といって悪ければ日本語化された）ジョイスこそが、川端にとっては有用であったというわけだ。他方、中国でもヴァージニア・ウルフやマンスフィールドを介して「意識の流れ」の手法は導入されたが、林徽因のような例外を除いて、うまく中国文学に溶け込ませることはできなかった。橋本によれば、それはウルフらの駆使した自由間接話法が中国語の文法的特性に馴染まなかったからである。

橋本はすでに前著の『物語における時間と話法の比較詩学』で、中国語および日本語では自由間接話法の翻訳に困難が伴う一方、語り手の語りと登場人物の視点が重なり合う「オーバーラップした語り」が優勢になりがちだと論じていた。私自身、文芸批評を書いていて常々不思議に思うのは、日本の小説の文体はなぜこうも簡単に主人公の主観に「汚染」されてしまうのかということである。主観性を排した純粋な三人称客観は、日本では総じてよそよそしい文体でしかない。橋本は前著ではこの問題をナラトロジーや言語学から究明し、本書ではそれをモダニズムの翻訳過程から分析したわけだ。

橋本がモダニズムの「越境」のもたらした一つの文学的達成として評価するのが高行健である。「意識の流れ」を「言葉の流れ」と読み替えた高行健は、「おまえ」と「私」の物語が響き合う代表作『霊山』では、ウルフのように語り手の語りとも登場人物の語りともつかない一種の中間的な文体を発明した。「意識の流れ」というモダニズムの資源を利用することによって、『霊山』は中国語の文体の表現可能性を拡張することができた。

もとより、モダニズムを突き動かす動機は必ずしも一様ではない。例えば、ジョイスの小説は人類の諸言語と文学の歴史をすべて仮想的に収集するという、全体性への欲望を抱え込んでいる。ジャック・デリダはジョイスの『ユリシーズ』と『フィネガンズ・ウェイク』に見られる「潜在的な全体性のなかに、人類の潜在的に無限の記憶を精密に取り集める」という不可能な企てを、哲学におけるヘーゲルの仕事になぞらえていたが（『デリダとの対話』法政大学出版局）、それも十分な根拠がある。

しかし、この無限の言語的連想を内包したジョイス的な想起＝記憶のシステムは、中国のモダニズムの目指したものではなかっただろう。橋本に従うならば、高行健のモダニズム小説の核心は、中国語の文体の規則性に沿いつつも、今までは抑制されていた文体を顕在化させることにあった。モダニズムの運動は確かに各国語の文学を強く刺激しただろうが、そこからの進化の道筋はあくまで多様であった。本書はこの世界文学の生態系の一端を垣間見せてくれる。

本書の論述のもう一つの軸は魔術的リアリズムの変容である。魔術的リアリズムは二〇世紀半ば以降のラテンアメリカで興隆した後に、中国にも八〇年代以降に導入され、莫言がその代表的な作家だと見なされている。

橋本によれば、このラテンアメリカから中国への越境＝翻訳のなかで質的な変化が起こった。橋本はガルシア＝マルケスの「ラテンアメリカではすべてが起こりうるし、あらゆることがリアルなのです」という発言を重視しながら、『百年の孤独』や『ペドロ・パラモ』をはじめとするラテンアメリカの魔術的リアリズムが非現実的な世界を現実のように描いたのに対して、中国の魔術的リアリズムは逆に理論家も実作者も「現実を幻想に変える」ことに熱心であったと見なし、ここに中国側の「誤読」を見出す。

> 『百年の孤独』では、普通の価値観では常識的にありえないことを、ごく普通のことのように抑えて描くが、〔莫言の〕『赤い高粱』では、ひとつひとつは現実にありうることをひたすら誇張し、魔術的に仕立てていくのである。〔…〕莫言の文体と『百年の孤独』流の魔術的リアリズムは性質がまったく違うことがわかる。つまり、リアリズムと言うよりは印象主義的、象徴主義的である。（一九〇〜一頁）

要するに、ガルシア＝マルケスが非現実的な世界を現実化したのに対して、莫言は現実的な世界を非現実化したというのだ。ただ、これを「誤読」とまで強く言い切れるかは私には疑問があるし、そもそもこの魔術的リアリズムに関する章全体が橋本にしては図式的すぎるという印象を受けた。私の感じた疑問を二点だけごく手短に述べる。

第一の疑問は、「本家」のラテンアメリカの魔術的リアリズムについて、奇妙奇天烈な土着文化をありのままに（＝リアリスティックに）写生したものとする橋本の見解は正しいのかということである。確かに、アレホ・カルペンティエールが魔術的リアリズムをラテンアメリカの「驚異的現実」を反映したものと評したのはよく知られるし、これは先ほどのガルシア＝マルケスの発言とも通じる。しかし、橋本も引用する寺尾隆吉の『魔術的リアリズム』は、このカルペンティエールの見解に対する厳しい批判をいくつも紹介している。

第二の疑問は、中国の魔術的リアリズムにおいて「非現実的な出来事」の欠如が本当に支配的なのかということである。例えば、魔術的リアリズムに似た想像力は、すでに一九三〇年代の魯迅の実験的な短編小説集『故事新編』に認めることができる。そして、この『故事新編』には、女媧に向けて土人形が奇妙奇天烈な言葉を発する「補天」や三つの首級が鍋のなかで闘争する「鋳剣」のように、まさに「常識的にはありえない」非現実的・魔術的な寓話が含まれていた。

『故事新編』は八〇年代以降の中国現代文学を予告するきわめて重要な作品であり、ただの例外的なファンタジーとして扱うのは難しい。それは私の個人的な見解ではない。現に、莫言も現代小説のあらゆる要素――ブラックユーモア、意識の流れ、魔幻現実主義（マジックリアリズムの中国語訳）等――は『故事新編』の「鋳剣」によって先取りされているとまで述べていた（『莫言対話新録』文化芸術出版社、一九三頁）。だとすれば、『故事新編』は橋本の設定したテーマをすべて含んでいるわけで、本書でも重点的に取り上げる必要があったのではないか。

とはいえ、この魔術的リアリズムの章にも多くの貴重な情報が含まれているのは確かである。特に、橋本が例として挙げる陳忠実の『白鹿原』やチベットのザシダワの諸作品については、私は不勉強で知らなかったし、日本で理論的に論じられたこともたぶんほとんどない。と同時に、莫言、高行健、鄭義、余華といったメジャーな作家を横断する文体論的パースペクティヴを提示した著作も、私は他に知らない。東アジアの作品群を文化的越境＝翻訳の産物として一気に論じきることによって、現代文学の特性をえぐり出すこと――、この幅の大きさこそが本書の真骨頂だろう。

振り返ってみれば、昨今の文学理論の現場では、ゲーテ以来の「世界文学」というアイディアを、現代のグローバル化を背景にしつつ創造的・批判的に再起動しようとする仕事が各方面で現れている（デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か』、フランコ・モレッティ『遠読』、曹泳日『世界文学の構造』等）。とはいえ、開放系としての＜世界＞をただ称揚するだけでは、閉鎖系としての＜ネーション＞の裏返しにしかならない。「世界文学」に価値を見出そうとするのであれば、まずは＜世界＞に何らかのサブスタンシャルな意味を付与する必要がある。

橋本の採用した、文体・翻訳・誤読といった道具立ては、そのような作業にも役立つ。本書を読んでいると、＜世界＞の実体とは文化的伝達の経路そのものではないかと思えてくる。そして、この世界性を帯びた流通経路のなかで、それぞれの文学のもつ「語り」のスタイルもたえず再発見・再発明されていくのだ。他者（世界）がなければ自己（国語）もない――、それは当たり前のことだが、本書以前に、それを東アジアやラテンアメリカの文学の特性に即して具体的に捉えた研究は決して多くなかった。

そもそも、かつて野家啓一が『物語の哲学』で言ったように、人間とは物語る欲望に取り憑かれた動物であり、しかもその「語り」を現実や歴史と取り違える危うい生き物でもある。その意味では、ナラトロジーとはたんなる文学研究の一分野に留まらず、「語り」がいかに語る主体や語られる客体（時間や空間を含めて）を組織し、いかに社会的現実を生み出すかを究明する総合的な学問になり得る。橋本はこの繊細かつ微妙な「語り」の研究を踏まえて、文学の翻訳と変容という古くて新しい問題領域を照らし出した。複数の言語を大胆に横断しながら、小説文体の不思議な魅力を改めて伝えようとする本書は、多くの読者に新たな思考の手がかりを与えてくれるだろう。